

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530597

研究課題名(和文)自己産出系の制度理論とその視覚的表現モデルの構築による機能分化社会の解明

研究課題名(英文)Autopoietic system theory and functionally differentiated society

研究代表者

佐藤 俊樹 (Sato, Toshiki)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：10221285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、より明晰で、社会学で従来使われてた術語系と連続性の高い術語系を新たに整備して、N・ルーマンの問題意識を引き継ぎつつ、自己産出系の理論の新たな構築を提案した。その際、重要な概念や論理展開について理解しやすい視覚的な表現、例えば主要な概念の模式図や複数の理論モデル間の対照図、制度ごとの自己産出機構の模式図と対照図などを工夫することで、狭い範囲の専門家以外にも理解しやすくなった。それによって、自己産出系のみならず、社会学の生成期の学的成果もより理解しやすい形で再定式化できた。

研究成果の概要(英文)：Visualization of theoretical concepts and explanation with visual expression have been always underestimated in sociology, partly because of its tradition and origin in humanities and partly because of the lack of systematic and accumulative works for open use. In this research project, we reconsidered terminology of autopoietic system theory, reconstructed its new theoretical and logical model, and invented some original visual expressions, which cover not only autopoietic system but also social mechanism found in sociology, especially in the birth of modern sociology and its predecessor called "moral statistics". Those tools are very useful for sociological observation, education, and recursive reflection of popular participants living in functionally differentiated societies.

研究分野：社会学

キーワード：自己産出系 機能的分化 視覚的表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 生物学者のH・マトウラナとF・ヴァレラが創案し、N・ルーマンが社会学に導入した自己産出系 autopoietic system の理論は、T・パーソンズらの物理学的モデルによるシステム論を根底的に革新するものとして、ここ数十年、日本の社会学だけでなく、国際的にも、また経営学・教育学・政治学などの隣接分野からも注目されてきた。研究代表者も日本語での理論研究や英語の解説論文などで、いくつか重要な成果をあげており、例えば社会学の国際学会 International Sociological Association の公式事典 Sociopedia.I.S.A.の一章として、欧米の研究動向をふまえて、日本独自の研究成果を発信できた。

(2) これらのほとんどは、平成 21-23 年度の科研費基盤研究(C)「意味システム論からみた都市の自己産出性の研究」の成果でもある。この研究では日米欧の都市をとりあげ、その自己産出系的特性を明らかにした。成果の主な部分は単著である『社会学の方法』などで公刊できたが、これらも自己産出系論の潜在的可能性を完全に引き出したとはいいがたい。特に、分厚い研究蓄積のある経験的な制度分析への応用が手薄なため、自己産出的な制度の集合体とされる機能分化社会のあり方も明確になっていない。

(3) その理由は二つある。第一は、社会の自己産出系論の論理構成がルーマン個人の語彙に頼っており、術語の平易さと明晰さに欠けることである。そのため、「ルーマン語」になじみのない大多数の研究者には理解しがたく、論理的な不整合をごまかされたように感じられる。ルーマンは「境界維持系」や「メディア」などのパーソンズの術語を流用したため、実際にかかりの

不整合が生じており、概念的にも論理展開の上でも混乱を招いている。第二は、第一の点の帰結でもあるが、具体的な制度への応用が概論的な水準にとどまっていることである。

(4) こうした状況を打開するには、(1)平易で明晰な術語系による(=「ルーマン語」によりかからない)自己産出系の理論を構築し、かつ、(2)重要な概念や論理展開について理解しやすい視覚的な表現、例えば主要な概念の模式図や複数の理論モデル間の対照図、制度ごとの自己産出機構の模式図と対照図などを工夫することで、狭い範囲の専門家以外にも理解しやすくした上で、(3)経営組織や都市、マスメディア、政治、科学、教育などの制度の実証研究に対して、理論的に貢献できる部分を具体的に示す必要がある。

(5) 研究代表者はすでに組織や都市の経験的な分析に手をつけており、それによって今後の課題も明確になった。(1)に関しては問題関心を共有する研究者との討議による反省と再検討が、(2)に関しては視覚的な表現技能の習熟が、(3)に関しては政治や科学など、応募者には予備知識の少ない領域の研究への関与が欠かせない。一人でこれら全てに対応するのは難しいが、幸い、所属する東京大学総合文化研究科国際社会科学専攻は、教員に社会科学の各分野の先端的な研究者を集め、自己産出系論を用いて制度分析に携わる大学院生も学んでいる。前者は(3)に必要な知識や評価を得るのに最適であり、後者は(1)(2)(3)で重要な研究協力者になれる。そうした研究環境をうまく活用することで、(1)(2)(3)を達成できる状態にあった。

2. 研究の目的

(1)平易で明晰な術語系による(=「ルーマン語」によりかからない)自己産出系の理論を構築する。

(2)重要な概念や論理展開について理解しやすい視覚的な表現、例えば主要な概念の模式図や複数の理論モデル間の対照図、制度ごとの自己産出機構の模式図と対照図などを工夫することで、狭い範囲の専門家以外にも理解しやすくする。

(3)経営組織や都市、マスメディア、政治、科学、教育などの制度の実証研究に対して、理論的に貢献できる部分を具体的に示す。

3. 研究の方法

(1)の平易で明晰な術語系による自己産出系の制度理論の構築に関しては、すでに部分的に着手しており、研究期間内に新たな理論モデルをかなり整備できた。

具体的には、マトウラナ&ヴァレラの最初の発想である「要素のネットワークによる要素の再生産」を基軸にすえて、ルーマンの用いた術語群を一部改変しつつ、より明確かつ整合的な形で制度の自己産出系を再定義する。それによって術語の流用からくる混乱を解消し、他の自己組織的システム論(自己産出系論導入以前のルーマンのそれも含む)とのちがいを明らかにする。

(2)の視覚的な表現モデルづくりでは、必要な描画技術などを習得しつつ、大学院生の協力者との共同作業によって、主要概念群の模式図、システム形成の論理的あるいは時間的な展開図、他の理論モデルとの比較図、制度ごとの自己産出機構の模式図と対照図などを作成した。

視覚的な表現は直感的にわかりやすい分、安易な単純化がおきやすい。そのため、(1)の術語系を用いて、図化できない部分も明示しながら、意味内容を適切にコントロー

ルしていく。さらに、(2)の成果をネットなどで一般公開することで、他の研究機関の研究者による改良も期待できる。

(3)の経験的な制度研究への応用では、経営組織や都市、マスメディアなどでは一部着手しており、(1)(2)を活用してそれらを拡大発展させた。政治や科学などについては、各分野を専門とする研究協力者と密接に連携して、ルーマンによる先行研究を批判的に継承した応用例をつくれた。その上で、各制度領域の自己産出系の特性を横断的に概観することで、現代の機能分化社会のあり方を解明できた。

(3)の作業でも、主な焦点は「要素のネットワークによる要素の再生産」のしくみになる。例えば、要素の自己産出機構が各制度の固有な特性に応じてどう変異しているかに着目することで、各制度間の共通性と独自性を同時に明らかにできた。

4. 研究成果

研究の三つの柱のうち、(1)の平易で明晰な術語を使った自己産出系論の構築については、研究協力者との討議を通じて、ほぼ二年度までに完成させた。

(2)の視覚的な表現モデルの創出については、いくつかの描画系ソフトを購入して、試してみた。その結果、描画の精度より、概念をより正確に表現するための工夫の方がはるかに重要であることがわかり、より一般的な文書作成ソフトやプレゼンテーション用ソフトの描画機能を使いながら、文字テキストでの解説との協働を重視して、汎用可能でかつ第三者による改良も容易にできる形の表現モデルを作成した。

(3)の経験的な制度分析では、最初の二年間で必要な文献資料を集めて、二年度と三年度に(1)の基礎研究と連携して分析を深

め、最終年度に(2)の表現モデルを最大限に活用して、現代の機能分化社会の全体像を明らかにした。三年間に作成した論文のうち、いくつかは共著の形になったため、他の執筆者の都合でまだ刊行されていないものもあるが、研究代表者の論文はすでに完成して印刷可能な状態にある。

関連するプレゼンテーション用の素材は非常勤講師での講義に用いたほか、一部はすでに所属する大学のウェブなどで公開されている。残りも順次公開していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

佐藤 俊樹、東アジアの産業化と日本の不平等、統計、査読無、vol.66、no.2、2015、pp.10-16

佐藤 俊樹、探偵(小説)には向かない職業、ユリイカ、査読無、vol.46、no.14、2014、pp.74-82

佐藤 俊樹、『社会学の方法的立場』をめぐる方法論的考察、理論と方法、査読無、vol.29、no.2、2014、pp.361-370

佐藤 俊樹、都市生成の意味論と形式言語 もう一つの自己産出から、国際社会科学、査読無、vol.62、2013、pp.27-47

〔学会発表〕(計 1件)

佐藤 俊樹、近代化論の可能性：外なる近代から内なる近代へ、日本社会学会(企画シンポジウム)、2013年10月13日、慶応義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)

〔図書〕(計 1件)

佐藤 俊樹 他、新世社、社会学ワンダーランド、2013、300(編集と分担執筆、分担執筆分は1-30頁、31-56頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 俊樹 (SATO, Toshiki)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：10221285

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：